

変化を起こす2時間半

リバーサ会議のつくり方 マニュアル

Reverse
Rebirth





はじめに

「いい講演会だったね」だけでは終わらせない

講演会やセミナー、シンポジウムを開催した後、どんな成果が生まれていますか？

起こしたい変化があって企画したはずですが、その後、実際に変化は起きていますか？

わたしたちは自分たちが住む長野県上田市で、2007年頃からさまざまな講演会やワークショップ、シンポジウムを企画してきました。しかし当時は、気運が高まることはあっても具体的な変化はあまり起きず、「どうすれば成果を生み出せるんだろう……」とずっと考えていました。

また、NPOだけで、できることには限界があり、行政と連携して取り組みたいと願っていました。しかし話し合いの場では、いつの間にかついつい熱が入ってしまい「こうすればいいと思います。なぜやらないんですか?」と迫るような言い方になってしまい、タッグを組めるような関係

にはなれませんでした。

ところが2021年以降、「リバーズ会議」というスタイルの勉強会を始めたところ、変化が生まれはじめたのです。

市役所のある職員の方は、「(個人的には)上田市はいつか公共交通を残すのが難しくなる時が来ると思います」と言っていました。その方が参加してくれた3回目のリバーズ会議のテーマは「交通まちづくりでリバーズ!」。その分野の第一人者である関西大学教授・宇都宮浄人先生からの「交通が先か、まちづくりが先かは鶏と卵の関係。まずは卵をたくさん産んでくれる鶏(公共交通)を育てよう」というレクチャーでした。終了後、その職員の方が「全職員が聴くべき話でした」と目を輝かせて話してくれたことは、今でもよく覚えています。

その後、「交通まちづくり」が、市の政策にも反映されはじめて、上田電鉄との共同事業にもつな

がりました。そして2026年2月現在、「交通」や「まちづくり」に関するテーマで上田市役所のいくつかの部署との協働・連携が始まっています。

以前は起きなかった変化が、なぜ起きようになったのか。試行錯誤しながらつくり上げてきたリバーズ会議のスタイルを、この冊子にまとめることにしました。

このまちに住み続けるために

人口減少・高齢化、公共インフラの老朽化、スプロール化・スポンジ化——現在、多くの地方都市は山積する課題に直面しています。そこへ気候変動が追い打ちをかけ、わたしたちは未曾有の状況の中にあります。だから解決方法も前例がなく、自分たちで創り出す必要があります。市民だけで解決できるとは思えないし、行政だけでも無理です。事業者も含めて、それぞれの役割と強みを持ち寄り、スクラムを組まなければこのまちに住み続けられないと確信するようになりました。

それで、わたしたちは「上田リバーズ会議」を始めました。

「リバーズ」には2つの意味を込めています。人口増加時代のままの政策や地域のあり方を逆転させる(Reverse)、そして再生させる(Rebirth)——どちらも日本語で「リバーズ」と読めることから、この2つをかけています。コンセプトは『立場の垣根を越えた学びと対話の会』としました。

「持続可能なまちづくり」をめざして市民が企画する「リバーズ会議」ですが、ここで紹介する進行スタイルは公民館や学校、行政が企画する勉強会や講演会などでも、使っていただけます。「いい講演会だったね」だけに終わらせない、変化を起こす会のつくり方を紹介させてください。

上田ビジョン研究会
NPO 法人上田市民エネルギー
代表 藤川まゆみ

リバース会議の流れ 基本の2時間半

変化を起こし、成果を生み出す会をつくるために、「前提の目線合わせ」と「コミュニケーション」をどう組み込むか——リバース会議の基本の流れを紹介します。もちろん、必要に応じてアレンジできます。次頁よりそれぞれの項目について解説します。

01 会が始まる前のセッティング

02 主催者挨拶・会の説明 (10分)

03 対話のルール

・タイムスケジュールを共有する (5分)

04 参加者同士の自己紹介 (5分)

05 データで目線合わせ (10分)

06 講師のレクチャー (40分)

07 感想を聞き合う対話の時間 (10分)

08 質問・意見をフォームに記入 (5分)

09 講師とファシリテーターの 対話セッション (50分)

10 主催者挨拶・次回予告 (5分)

11 アンケート・記念撮影 (5分)

01

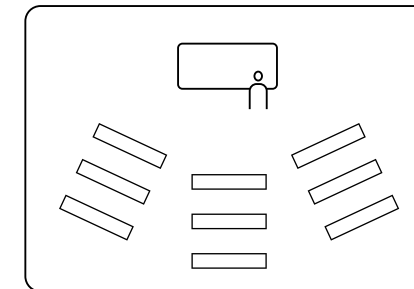
会が始まる前のセッティング

有意義な会にするために席のレイアウトを大事にしています。司会とオンライン係以外のスタッフも分散して座ります。主催者と参加者の垣根を超え、並んで一緒に学ぶ姿勢もリバース会議ならではの姿です。

開場前からできる工夫

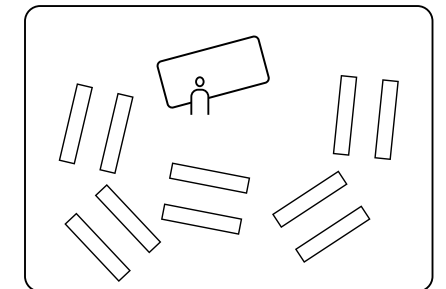
例 1

三列になっている会議机の左右の列に少し角度をつけてスクリーンをみんなで見やすいような雰囲気に。



例 2

わざと崩してランダムな並べ方にし、リラックスした場に。



始まる前に投影するスライド例

なるべく初めて会う人の隣に座るよう促したり、オンライン参加者へのメッセージを記載したりしてます。Web アンケートフォームのQRコードを掲載すれば、会の中で活用できる事前アンケートを取ることもできます。



〔開始までに映すスライド例〕(上田リバース会議)

注意事項は会場とオンラインでわかる

リバース会議では、できるだけ多くの方が参加しやすいよう、会場とオンライン (Zoom など) のハイブリッド開催をすることが多いです。とはいえ、やはり会場への参加をすすめたいところ。オンラインは配信やカメラなどにスタッフが 1 ～ 2 人かかりきりになるので、難しい場合は会場のみで開催にしましょう。

はじめに

- 本日の会は、今後の活動に活用するために、写真や質疑応答などの記録やアンケートのご回答は、今後の活動に活用させていただきますので、予めご了承ください。

Zoom参加のみなさんへ

- マイクはミュートで、ビデオはご自由に。
- 今回は「傍聴」での参加になりますが、「チャット」は、いつでも歓迎です。
- Zoomから落ちた場合は、慌てず、再度、入り直してください。スタッフが待機しています。
- 最後にzoomを退出するとアンケートが表示されますので、ご協力をお願いします。

[注意事項のスライド例] (上田リバース会議)

オンライン参加者の存在も共有

その日の会場参加者数とオンライン参加者数を伝え、両方に参加者がいることを共有します。

必要な事務連絡はここで

冒頭で「写真や記録・アンケートへのご協力をお願い」と「オンライン参加者への説明」をしておきます。

進行は会場がメイン

オンライン参加者は音声での発言はできない形にしています。なぜなら、会場内での少人数の対話がリバース会議の肝だからです。ただし、チャットへの書き込みと、後に紹介するフォームへの記入は OK としています。

オンライン担当スタッフ

オンラインにはフォローするスタッフが最低 1 人は参加し、自己紹介を促したり情報を共有したりします。オンライン参加者同士でチャットが盛り上がる場合もあります。

主催者もしくは講師による冒頭の挨拶

会の始まりを告げ、この場の目的を共有する大切な時間です。挨拶は長くなりすぎないように、3 分以内で「想い」を伝えるのがコツです。(リバース会議では形式にこだわらず、かしこまった主催者の挨拶を省略することもあります)

「顔が見える」主催者の言葉

代表者またはその日のテーマに最も熱い想いを持つメンバーが挨拶しても OK です。「なぜわたしたちが今日の企画を立ち上げたのか」という生の声が、参加者の共感を生みます。

地域との「連携」を可視化する

もしくは、連携している団体や行政の担当者に挨拶してもらうことで、この会議が地域と連動していることを示せます。

首長クラスの方の参加について

リバース会議は変化を起こすことが目的です。変化を起こすためには、行政との接点をポジティブにつくっていくマインドも大切です。市民が開催する会でも、市長村長や都道府県知事が特に力を入れているテーマであれば、呼び寄せてみては？ その際は冒頭または会の終わりの挨拶をお願いするとよいでしょう。さらに次頁の「対話のルール」へと繋げることで、役職を超えた一市民としての参加を促す流れをつくります。また、首長が参加すると行政の方も参加しやすくなります。

主催団体および会の目的を紹介

上田を **Reverse** 逆転させて

上田を **Rebirth** 再生させよう！

<上田リバース会議>

市民、行政職員、議員、企業、金融機関、大学生、高校生

立場の垣根を超えた学びと対話の会

[主催団体紹介のスライド例] (上田リバース会議)

03

対話のルール

・タイムスケジュールを共有する (5分)

安心感を持ってもらうための対話のルール

ルールの共有は、対話をしやすくなると好評です。基本の形をベースに、地域の雰囲気や参加層に合わせて調整してください。

リバース会議の「対話」のルール

- この場は、誰かの責任を追及したり、意見陳情をする場ではありません。
- 一人ひとりが**〈自分ごと〉**として語り学び合う場です。
- **〈わたし自身が感じていること〉**も**〈相手を感じていること〉**も大切にしましょう。
- どんな意見も〈肯定も批判も含めて〉自由に発言してOK!
- 言いづらいこと、こんなことを言ったら叱られるかなも、思いやりがあればOK!
- 時間をひとり占めしないよう注意しましょう。
- 大きな声だけでなく、小さな声にも耳を傾けましょう。
- 黙って聞いているだけの参加もOK! 沈黙もOKです。「今日は聴く専門で」と。

[対話のルールのスライド例] (上田リバース会議)

タイムスケジュールを伝えて見通しよく

本日の流れ 2時間半

- はじめに [10分]
- 参加者同士の自己紹介 [5分] ※近くの方3~4人で1人1分
- 主催者より本日の前提 [10分]
- 講師のレクチャー [40分]
- 参加者3~4人でレクチャーについて感想の共有 [10分]
- 質問や意見がある人はSlidoに入力 [5分]
- Slidoの質問や意見をネタに講師とファシリテーターが対話 [50分]
- 閉会挨拶 [3分]
- お知らせ/アンケートのお願い/写真撮影 [5分]

[タイムスケジュールのスライド例] (上田リバース会議)

参加者の「心づもり」をつくる

タイムスケジュールを冒頭で共有し、自己紹介、対話の時間、質問フォームへの入力など、「参加のタイミング」を予告します。これにより、参加者は「ただ聞くだけ」ではなく、主体的・能動的に参加する心づもりができます。

「調整の余白」でゆとりをつくる

前半のプログラムが延びることはよくありますが、後半の「質問フォームを基にした講師との対話 (50分)」の枠で柔軟に調整が可能です。あらかじめ「状況に合わせて柔軟に対応します」と伝えておくことで、運営側も参加者もゆとりを持って臨むことができます。

04

参加者同士の自己紹介 (5分)

3~4人の参加者でグループになってもらい、一人1分で順番に自己紹介します。参加者の緊張を解き、場を一気に温めることができます。

「個」として出会う入り口

名前や職業、参加動機など、内容は自由です。まずは声に出して誰かと話すことでリラックスし、その後のレクチャーを聞く姿勢が「受け身から能動へ」と切り替わります。

「最初の一人」を迷わせない工夫

誰から話すか迷うタイムロスを防ぐため、ファシリテーターが「今日一番遠くから来た人」「一番厚着をしている人」など、ユニークな基準を設定しましょう。これだけで場が和みます。

リズムをつくるタイムキープ

話し声で会場が賑やかになるため、マイクを使って大きめの音量で進行します。「1分経ちました、では次の方どうぞ」「3人グループの方は残りの時間を雑談に」など、明るくテンポよく仕切ることで、会場全体に心地よい一体感が生まれます。



「肩書きを言わない自己紹介」のすすめ

ワークショップ的な要素を強めたい場合や、よりフラットな対話を促したい時は、「仕事や肩書きを言わないルール」にしてみるのも効果的です。立場の鎧を脱いで「個人」として参加してもらいやすくなり、相手の属性を意識せずに対話できる雰囲気が生まれます。会の終了時には「よかったら名刺交換をどうぞ」と促すと、あちこちでお互いにびっくりする声が聞こえてくることも。

データで目線合わせ (10分)

講師のレクチャーに入る前に、主催者からその日のテーマの背景にあるデータ・情報・課題感を共有して目線を合わせることで、参加者の安心感を生み、能動的な参加につなげます。



〔目線合わせのスライド例〕(上田リバー会議)

会の課題認識を共有

たとえばその日のテーマが「公共交通」であれば、地域のバスや鉄道の利用者の推移、高校生の家族による送迎の実態、スプロール化の状況など、市町村の計画に載っているデータやグラフを使って、この会に込めた課題認識を共有します。このあとに続く講師のレクチャーと自分たちのまちの状況をつなげるための、大切な目線合わせの時間です。課題を伝えるのに十分でない場合には国・都道府県・民間のデータも活用します。公共性の高い機関が出しているデータは信頼性が高く、さまざまな立場の参加者に説得力をもって届きやすいと感じています。

事実（ファクト）ベースで

データなどから「同じ景色」を思い浮かべて、「地域の現実」を知り、「わたしたちの問題」として自分ごと化して聞く準備が整います。事実（ファクト）に基づいた共有を行うことで、個人の主観や感情に偏りすぎない、論理的で前向きな議論のベースが築かれます。



※ 過去のリバー会議の動画を公開しています。目線合わせのデータは動画を参考にしてください。

データから地域の現実を俯瞰する

各自治体の「総合計画」「立地適正化計画」「公共施設総合管理計画」や「その会で扱うテーマに関連する計画」に掲載されているデータから、気になるものをピックアップして10分のプレゼンにまとめます。ここでは答えを出さず、地域をデータで俯瞰する作業から発見したことや課題感を参加者と共有しましょう。「個々のデータ」を並べて俯瞰すると、各地域課題がつながっている構造が見えてくることがあります。たとえば、スプロール化やスポンジ化が、地価の下落や地方財政の逼迫、水道などのインフラ維持に影響を与えているというような構造です。

講師のレクチャー (40分)

上田リバー会議の場合、9割方地域外から講師をお招きしています。

迷わず第一人者に依頼

その会でわたしたちが学びたいことをレクチャーしてくれる講師を、書籍やインターネット、講演動画などから探しています。そのテーマの第一人者と呼べるような方にも迷わず声をかけています。謝礼や交通費・宿泊費の支払いについては最初にこちらからお伝えします。

事前打合せは必要

講師とは、できる限り事前にオンラインで打ち合わせをしています。企画の趣旨、「なぜお願いしたか、どんな話を伺いたいか」をお伝えし、進行について説明します。すると講師のほうから「こうやってみませんか？」と提案をいただくこともあります。講師に丸ごとお任せにするのではなく、この事前のコミュニケーションが講師のモチベーションを上げ、会の熱量も高まります。ただし、忙しい中時間をつくってもらうので打合せは60分を超えないよう気をつけています。

レクチャー時間は短めに

後半の質疑応答や対話セッションの時間を多めに確保するため、レクチャーは40分をお願いすることが多いです。40分はレクチャーとしては若干短めですが、事前の打ち合わせで「40分で話し足りない内容があれば対話セッションの時間にお話いただけます」と伝えておきます。講師には、対話セッションの時間を多めに取っているのでレクチャーが多少延びても調整できることを説明しておきます。もし、講師から「60分はほしい」との意向があれば、対話セッションの時間を減らして応えるようにしています。

講師を地域外から呼ぶ効果

客観的な視点

地域に住みながら地域を考える、とは違う視点を専門的な立場で持ち込んでもらえます。

中立性の担保

利害関係のない外部の専門家だからこそ、公平かつストレートな提言が可能。これにより、地域で停滞していた議論を動かす「突破口」をつくれます。

同じ轍を踏まずに済む

全国各地の現場を知っている専門家が伝えてくれる多くの成功パターンと、それ以上の「失敗の本質」から課題を客観視し、「自分たちならどうするか」と発想しやすくなります。

新しいネットワークとつながる

地域外の講師を招くことは、その講師が持つ広大なネットワーク（知見・人脈・技術）の入り口に立つことを意味します。実際上田リバー会議は講師を通して各分野の全国のネットワークとつながっています。

感想を聞き合う対話の時間（10分）

講師のレクチャーの直後に、自己紹介をしたグループで感想を聞き合い、感じたことを言葉にする時間をつくっています。一般的な質疑応答では発言者が限定されますが、対話の時間は全員が発言者になります。この時間が具体的な変化への入り口かもしれません。

<感想共有：10分>

会場： 先ほどの自己紹介をした3～4人で

オンライン： チャットに自由に書き込み他の方のコメントへの返信もぜひ

〔感想共有のスライド例〕（上田リバース会議）

学んだことはアクティブリコールで定着

アクティブリコールとは、アウトプットすることで記憶を定着させる方法です。聞き終えた直後に内容を思い出し、言葉にすることで脳の記憶回路を刺激します。単に聞くだけよりも、学んだ内容を忘れにくい「長期記憶」へと変換します。

立場を超えた「個人の視点」での共有

レクチャー直後に語り合うことで、「一人の間」としての素直な驚きや疑問を共有しやすくなります。この等身大のやり取りが、立場を超えた深い共感と主体的な関わりを生み出します。

なぜ「3～4人」なのか？

3～4人のグループ編成は、上田リバース会議を開催しながら見つけた「黄金のバランス」です。

全員が主役になれる

5人以上では「聞くだけの人」が生まれやすく、2人では1対1の緊張感から気疲れしてしまいます。3～4人は、ほどよい安心感がうまれる物理的距離で、発言への心理的ハードルが最も下がる人数のようです。

心地よい責任感で当事者意識を

少人数なので「自分が話さないと会話が止まってしまう」という心地よい責任感が自然に生まれ、参加者を能動的な姿勢へと導きます。

シェアリングで視点の拡大

自分とは異なる参加者の感想を聞くことで、一人では気づけなかった新しい視点や解釈が得られます。この対話の時間があることで、一つのレクチャーから数人分の気づきを吸収できます。

密度と持続のための10分制限

10分だと「もう少し話したかった」と感じるかもしれません。残りの熱量は、終了後の交流や、帰宅後の振り返り、そして実践へのエネルギーとして持ち帰っていただけそうです。

質問・意見をフォームに記入（5分）

会場の熱量を可視化し、匿名性を担保することで、自由なアウトプットを促します。わたしたちは「Slido（スライドー）」というオンラインフォームを使っています。スクリーンにQRコードを映すと、会場だけでなくオンラインの人にも入力してもらえます。

下のSlidoのQRコードを読み込んで
質問や意見を記入してください（5分）

<短文で端的に>
他の人の投稿に共感したら「いいね！」してください。



〔フォーム記入ののスライド例〕（上田リバース会議）

「匿名性」で立場の鎧を脱ぎやすく

匿名でも入力できるため、行政職員や企業の方も「立場上言いにくい……」という不安を気にせず、本音を投稿できます。

「質問」だけでなく「意見」も書ける

「講師がすべての答えを持っている」という依存マインドを避け、参加者自身も知恵の出し手となるよう、「質問や意見」として呼びかけます。これにより、双方向の対話が生まれます。

デジタルとアナログの融合

スマホ操作が苦手な方のために、ポスティブトも用意します。スタッフが席を回り、書かれた内容を代わりに質問フォームへ入力することで、誰一人取り残さない情報共有を実現します。

「アウトプットすること」自体の価値

対話セッションですべての投稿に回答できないこともあります。自分の考えを外に出し、スクリーンを通じて他の参加者と共有すること自体に、深い学びと共感の効果があります。（時間があれば、全部読み上げます）

質問フォーム担当者の配置

ファシリテーターが兼務してもよいですが、スムーズな運営のため、設定や操作に慣れた「質問フォーム担当」を1名配置するとスムーズです。スクリーンへの切り替えタイミングや、投稿の整理など、ファシリテーターと連携して進めます。

Slidoとは？

参加者がスマートフォンから質問や意見をリアルタイムで送れるオンラインツール。匿名で投稿できるため、立場にとらわれず個人として発言しやすく、その場で画面に表示しながら進行できます。プレゼンテーションモードで表示すると、文字が大きくなって参加者と共有しやすくなります。Slidoには無料版と有料版があり、上田リバース会議では無料版を使っています。

09 講師とファシリテーターの対話セッション (50 分)

後半の対話セッションは、フォームに寄せられた多様な問いや意見を元に、講師・ファシリテーター・会場が一体となって対話を深める時間です。冒頭、ファシリテーターから投稿に「いいね」ができること、すべての投稿にコメントできない可能性があることを伝えます。



「いいね」で会場の関心を可視化する

Slido の「いいね」機能を活用し、共感の多い投稿を優先的に取り上げます。これにより、「みんなが聞きたいこと」を軸にした納得感の高い進行が可能になります。

柔軟なピックアップと話題の展開

上から順に答えるだけでなく、講師やファシリテーターが「これは深掘りしたい」と感じる投稿も選びます。講師と会場が対話しているようなライブ感が生まれます。

ファシリテーターの心得

全ての質問に答える必要はありません。それよりも、一つの質問から「地域をリバーズ（再生・逆転）させるための本質的な問い」を講師から引き出すことを優先しましょう。ファシリテーター自身が事前に講師の資料や著作本を読み込んだり、関連する地域的话题を用意したりしておくと、全体を見渡しながら落ち着いたファシリテートができます。

レクチャーの「続き」や「地域の具体策」を引き出す

40 分のレクチャーでは収まりきらなかった深掘り情報や、ファシリテーターが用意した「地域の現状資料」があればよいタイミングで投入します。一般論で終わらせず、「この地域ならどうするか」に引き寄せます。

ファシリテーターは「当事者」として振る舞う

司会に徹するだけでなく、主催者として自らの考えを話したり、講師と議論したりすると盛り上がりやすいです。その熱量が、参加者が「自分もならどう考える？」と思考を促す呼び水になります。

「次のアクション」が見える締めくくり

参加者が持ち場に帰り、遠くない将来に変化を起こせるように背中を押すのが、リバーズ会議です。無理に結論を出すことはしません。最後は「自分たちのまちで明日から何ができるか」というヒント、アイデア、ビジョンが、参加者一人ひとりの心に浮かんでいる状態でセッションを締めることを目指します。

最後は講師から地域へ「エール」をいただく

対話セッションの最後には、講師から参加者や地域に向けた、エールを含めたメッセージをもらいましょう。地域の課題（現実）に向き合ったあとに、講師自身の経験に基づいた励ましや、「この地域のここが強みだ」といったポジティブなフィードバックをもらうことで、参加者は背中を押され、自分ごと化しやすくなります。

地域に引き寄せる

ファシリテーターが「今の話、わたしたちのまちで考えると、どう応用できそうですか？」と、あえて具体的に切り込むと、地域にとっての解像度を上げることができます。

10 主催者挨拶・次回予告 (5分)

次につなげる締めの挨拶

対話の余韻を「次なるアクション」や「具体的な実績」へとつなげる大事なプロセスです。対話セッションで生まれた熱量を、明日への活力に変えて持ち帰ってもらうための最後のひと押しです。最後の挨拶は「まとめ」ようにする必要はありません。むしろ、今日生まれた「問い」や「モヤモヤ」をそのまま肯定し、「またこの続きをお話しましょう」と、日常へ送り出すような温かい言葉で締めくくります。

挨拶の時間は3分程度で「共創」の姿勢を強調する

長過ぎない時間設定にすることで、参加者の集中力を保ったまま、心地よい余韻とともに閉会できます。外部に挨拶を依頼する際も3分でお願ひしましょう。

連携団体や行政の担当者に締めの言葉をいただくのも効果的です。これにより「ここから地域との連携が本格的に始まる」という力強いメッセージになります。

他のメンバーの顔も見えるように

ファシリテーター以外のメンバーが挨拶をすることで、運営チームの多様性と、多角的な視点を提示します。代表者に限らず、現場で共に汗をかけたメンバーが感謝を伝えるのも、参加者の共感を呼びます。

エールを「自分事」にする

講師からもらったエールを受け、主催者側からも「わたしたちはこう動いていきます、皆さんも一緒に歩みましょう」と、等身大の決意を述べることで、会場全体が「自分たちの問題」としてまとまります。

「次なる一步」をその場で示す次回予告

モチベーションが最も高まっているこの瞬間こそ、最高の告知タイミングです。次回の予定が決まっていれば必ず伝え、未定であっても「継続していく意思」を宣言しましょう。

11 アンケート・記念撮影 (5分)

「地域の力」を可視化するアンケート

アンケートは単なる感想集ではなく、地域を動かすエビデンス（根拠）や、主催者のエネルギー源になります。「答えてください」ではなく「地域や行政の背中を押す材料になります」「皆さんの声がこの活動の支えです」と、その声が何に使われるかを具体的に伝えることで、協力意欲を引き出します。

また、アンケートの時間自体が参加者にとっての大切なアウトプットになります。「本日の会での気づきを整理しながら、ご自身の対話や思考のプロセスを振り返っていただけますと幸いです」と伝えることで、内省を促す有意義な時間へと変わります。

アンケートのお願いは、落ち着いて丁寧に話すことを意識しましょう。主催者がバタバタすると、参加者も「あ、もう終わりか」と意識が出口に向いてしまいます。あえて「トーンを落として丁寧に」お願いすることが、回収率アップにつながります。アンケートはWebフォーム（QRコード）をメインにし、会場参加者にはQRコードをつけた紙のアンケートを配り、記入しやすいほうを選べるようにします。

「共にあること」を記録する集合写真

SNSでの報告や関係機関への報告書において、集合写真はこの日の空気感を伝え、参加人数が多ければ「これだけの人が関心を持っている」という最強のエビデンスになります。冒頭の許可に基づき、改めて感謝を込めて撮影をお願いします。





リバース会議の
エッセンスを
深掘りする続編を
刊行予定!

発行: 2026 年 3 月 第 2 版: 2026 年 8 月 発行者: 上田ビジョン研究会、上田市民エネルギー、NECO
info@eneshift.org 企画: 上田市民エネルギー、NECO 編集: 藤川まゆみ、平澤拓海 (上田市民エネ
ルギー)、くりもときょうこ、浅輪剛博 (NECO) デザイン: 村上圭一 (cbp)

この冊子は 2025 年度 2026 年度地球環境基金および
パタゴニアの助成金で制作されました。



リバース会議スタイルの会、まず一度やってみませんか? 過去の録画もご参考に。→